

子ども・若者の 声を聴くための ハンドブック

新型コロナウイルス
そのとき「現場」は
どう動いたか――



ユースワーク
研究会
ハンドブック

はじめに

2020年、新型コロナウイルス感染症が全国を襲いました。学校は一斉休校し、緊急事態宣言が発令されるなど、社会は大きな混乱に陥りました。誰しもが被害者となりましたが、特に、子ども・若者や社会的弱者と呼ばれる人たちの声は、「見えない敵」にかき消されてしまいました。この見えない敵とは誰だったのでしょうか。この間、子どもや若者の気持ちや思い、つぶやきが置きざり状態になってしまっている状況が続きました。学校の一斉休校は、子ども・若者から学ぶ権利を奪っただけでなく、「家庭」にさまざまな責任を押し付けたとも言えます。そのため、しんどい家庭にほどしわ寄せが行き、多くのストレスを抱えることになりました。このようなときにこそ「地域」の出番があるのではないのでしょうか。子ども・若者支援体制が量的に脆弱な中、子ども・若者の微かな「つぶやき」を拾うことができるのは、同じまちに暮らす地域住民です。“一次救急”の役割を担う地域住民が増えると、課題が深刻化する前に気づき、支援の手が届くことになります。そのような地域がもっと増えてほしいと願い、そのありかたを検討したのが本書です。

私たちが特に大切にしたいキーワードは「子ども・若者の声を聴く」ことです。SOSがなかったのは「困っている人たちがいなかったから」ではなく、「何も声を出せずに苦しんでいる状態だったから」ではないのでしょうか。今回、子ども・若者と関わる公共施設や子ども食堂、フリースクールなど、さまざまな団体がコロナ禍のときに何を考え、何に悩み実行していったのか、を「子ども・若者の声を聴く」視点からインタビューしました。

「非日常」が起きた時への対応は、「日常からの備え」で決まるとも言われます。新型コロナウイルスをきっかけにさまざまな「あたりまえ」が変わってしまいましたが、同時に、これまでの「備え」が役に立ったこともあるかもしれません。今回のコロナ禍における記録とともに、私たちの「日常からの備え」をどうアップデートするか、を考える材料になればと思います。これらの実践から、地域住民一人ひとりにできるヒントが見つかるかもしれません。「私たち一人ひとりは微力かもしれないが、無力ではない¹⁾」ことを実践するのは、今です。

1 - 長崎を中心に国内外の高校生が核兵器廃絶を求めて1998年から活動している
「高校生平和大使・高校生1万人署名活動」の合言葉。

突然の一斉休校、そのとき「地域」で何が起きていたか

～子ども・若者の声を聴く意義を再確認する～

一斉休校・緊急事態宣言発令、そのとき何をしたか？

2020年2月27日(木)の晩、突如発出された「週明けからの一斉休校要請」。多くの学校は翌28日が事実上の最終日となり、慌ただしく対応していました。子どもたちにとっても突然の話で、一時的な別れを惜しむ余裕すらなく荷物をまとめて下校する姿が見られました。家庭でも、誰がどうやって子どもの面倒を見るのか、急な対応に戸惑っていました。

次いで、4月7日(火)に7都府県に緊急事態

宣言が発令(その後全国に拡大)。この間、各地での行事は軒並み中止になり、ショッピングモールなどの民間施設だけでなく公共施設も閉館。「不要不急な外出の自粛」や「ステイホーム」の号令のもと、子ども・若者の行き場所はどんどんなくなりました。学校が始まらない中で、子どもたちの気持ちを丁寧に聴くことが後手に回っており、当事者の声が何かに反映される機会はほとんどありませんでした。

日にち		全国の主な流れ
1月	6日	武漢で原因不明の肺炎、厚労省が注意喚起
	14日	WHO、新型コロナウイルスを確認
	15日	日本国内で初めて感染確認
	30日	WHO、「国際的な緊急事態」を宣言
2月	3日	乗客の感染が確認されたクルーズ船、横浜港に入港
	13日	国内で初めて感染者死亡
	27日	首相、全国すべての小中高校に臨時休校要請の考え公表
		全国すべての小中高校に、3月2日(月)から臨時休校要請
3月	2日	要請を受け全国約99%の学校が休校を開始。放課後児童クラブ(学童保育)や保育園は継続
	9日	専門家会議、「3条件重なり避けて」と呼びかけ(その後いわゆる「3密」と呼ばれるように)
	24日	東京五輪・パラリンピック1年程度延期に
4月	7日	7都府県に緊急事態宣言。人の接触、極力8割削減を呼びかけ
	16日	緊急事態宣言を全国に拡大。13都道府県は「特定警戒都道府県」に
5月	4日	政府、緊急事態宣言を5月31日(日)まで延長
	14日	政府、39県で緊急事態宣言を解除。8都道府県は継続
	21日	緊急事態宣言、関西で解除。首都圏と北海道は継続
	25日	緊急事態宣言、全国で解除

[出典] NHKweb「特設サイト 新型コロナウイルス」より一部抜粋・加筆

<https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/chronology/>

誰かに叩かれるかもしれない恐怖の中、 「頼ってもいい誰か」を持つことの大切さ

新型コロナウイルスをきっかけに喚起された不安は、「皆我慢しているのに、お前だけがどうして我慢できないのだ」という非難、我慢させる正義を生み出した結果、自粛警察がはびこり、中傷へとつながりました。感染者が出た大学・企業への誹謗中傷もなされました。このような状況で、自分の気持ちを正直に伝えることができた子ども・若者はどれだけいたのでしょうか。「助けてコミュニケーション力」という言葉があります。「自分がなんとかしなければ」「できない自分が悪い」と自ら抱え込むのではなく、どんなに小さいことでも他者の力を借りようと SOS を発することができる力で、結果として何らかの支援につながりやすくなります。例えば、親や先生、友達に言いにくいこともあるでしょう。そんな自分の気持ちを安心して話せる誰かがいるかどうかは、助けてコミュニケーション力の強さに影響するのではないかと考えています。

非常時だからこそ、 「子どもの声を聴く」ことから

公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・日本は、『『子どもの声・気持ちをきかせてください！』2020年春・緊急子どもアンケート』で得た回答結果と子どもの権利条約をふまえ、「新型コロナウイルス感染症影響下における、子どもの育ち・学びの保障に関する提言¹⁾」を出しています。自己決定権が失われている状態は、自分の気持ちを出す機会が失われたこととも言えます。子ども・若者は自分勝手にわがままな存在だ、という声を耳にしますが、それ以上に彼ら彼女らの「自己決定の実際」が社会に届いていないことの裏返しでもあります。行動の選択肢や人間関係が限られがちな子ども・若者だからこそ、より丁寧に「声を聴き」、共に考えていくことが重要ではないでしょうか。

新型コロナウイルス感染症影響下における、子どもの育ち・学びの保障に関する提言

1. あらゆる状況にいる子どもたちの意見を聴き、新型コロナウイルス感染症対策などに最大限反映してください
2. 子どもたちに向けて、適切な情報提供とメッセージの発信をおこなってください
3. すべての子どもの多様な育ち・学びを保障し、子ども同士の格差をうまない対策を進めてください
4. 学校再開に際しては、各学校現場の取り組みに合わせて国の支援をおこなってください
5. 子どものこころのケアに配慮した中長期的な取り組みを国として支援してください
6. 休校要請など国の感染症対策による、子どもに対するインパクト調査・評価をおこなってください
7. 差別を助長しない取り組み、メッセージの発信を推進してください

1 - [出典] (公社) セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン 「子どもの声・気持ちをきかせてください！」

2020年春・緊急子どもアンケート結果 (SCJapan 調査) pp.4 - 7

https://www.savechildren.or.jp/jpnem/jpn/pdf/kodomonokoe202005_report.pdf



若者の「声」とともに在るユースセンター

～公共施設だからこそその若者支援の役割とは？～

子ども・若者が日常的に立ち寄り、駆け込み、気軽に話しにいける居場所「ユースセンター」。

若者の声を社会に繋ぐ拠点として事業を展開しています。

30年以上にわたってユースワークを実践してきた京都市ユースサービス協会は、この1年、どのように若者の「声」や「場」と向き合ってきたのでしょうか。

竹田 明子さん（公益財団法人 京都市ユースサービス協会 チーフユースワーカー）

若者の葛藤が好き。社会に対して、周囲に対して、自身に対して、スッキリしないその感覚をキャッチしてもがく。エネルギーの放出と消耗と再生。社会の歪や、未来の像を垣間見て、面白いなぁと学ばせてもらうことが多々ある。そんな日々を過ごしています。

聞き手：小倉 祐輔（NPO 法人スマイルひろば）



居場所を閉じていいのか ～公共施設としてのユースセンター～

世間で「新型コロナウイルス感染症」がニュースになり始めた、2020年2月初旬。協会の中でも事業を実施するかどうか議題になりましたが、3月の一斉休校以降も、当初事業はほとんど実施することとしました。しかし、委託元の京都市との協議の結果、3月末からグループ活動で使う貸館の利用が制限され、日々若者のたまり場となっているロビーが利用できなくなり、4月以降は事業実施不可の判断の連絡が入りました。緊急事態宣言が発令されてからは、スタッフの在宅勤務の調整や貸館の事務手続き、団体としてのガイドライン策定等に忙殺されていました。私たちが指定管理者として運営する「青少年活動センター（以降センター）」は、公共施設のた

め京都市の方針に影響されることはやむを得ません。しかし、日々居場所の必要性や若者との関わりの重要性を痛感しているからこそ、居場所を閉めることに対して、子ども・若者が集う「場」を活かす専門家であるユースワーカー¹一人ひとりの価値観が揺さぶられ、混沌とした状態でした。

結局、5月いっぱいセンターは閉館しましたが、この期間はどのセンターも施設整備等をしながら、再開に向けてオンライン交流や研修を実施したり、電話やメールを使って若者からの相談を受け、それを市と共有するなど、なんとか若者の「声」を聴き続けようと活動していました。

1・若者自身の成長、若者の社会的包摂と幸福を目指し手助けする専門スタッフのこと。日本には、イギリスのユースサービス（ユースワーク）の活動が紹介され、京都市ユースサービス協会は2006年から養成プログラムを実践。また、ユースワークに取り組む団体が集い「ユースワーカー協議会」を2019年に設立し、普及啓発や人材育成に取り組んでいる。<https://youthworkerCouncil.jimdofree.com/>



地域で、オンライン上で、居場所をつなぐ。

公共施設としてのセンターは閉じざるを得なくなりましたが、それ以外の事業については、市や地域と様々な協議を行いながら、ギリギリの対応を検討し続けました。市内 18 拠点で実施している「中学生等学習支援事業²⁾」は、高校受験が終わる 3 月末まで実施する必要があるため、報道が増えてきた 2 月中旬より実施のあり方を市と協議していましたが、学校の臨時休校が決まったことで、3 月 6 日には中止せざるを得なくなりました。

しかし、学校も公共施設の居場所も閉ざされた中、学習支援に通っていた中学生の状況が心配です。全員に状況を確認したところ、家庭で過ごすことがつらい、難しい状態にある中学生もいたことから、市と情報を共有し、どうあるべきかを議論しました。その結果、緊急個別対応としていくつかの拠点を「居場所」として開けることになりました。公共施設は使用できなかったため、これまで様々な事業で関わりのあった地域の自治会館などを使わせてもらうことができました。京都市内には大学が多く、クラスターが発生した大学に通う学生へのいわれない偏見や差別、中傷も起こっていました。そのような中でも、地域の民生委員さんが学習支援事業の意義を理解いただき、自治会館の利用許可をくださり、さらには毎回鍵の開け閉めまで担ってくださったことは、本当に有り難いことでした。感染症対策はしっかり行った上での開催でした

が、感染への不安から会場へ来なかった中学生もいました。それでも「休校、ステイホーム」下で過ごす若者一人ひとりの状況を思い、意地で居場所を開けていました。

また、センターは市の意向もあり SNS を使った相談は行っておらず、自粛中も事業広報は行っていませんでした。しかし、人と会えない・場に来られない状況が続く以上、できることをなんとかやろうとかけ合い、少しずつ実践を広げていきました。これまでセンターを利用していた学生グループのオンライン上での活動をシェアしたり、画面の向こう側にいる若者へ向けて様々な投稿を行いました。暇つぶしになればと意味のないようなことをやってみたり、他のユースセンターの SNS と交流をしてみたり、何がバズるか試行錯誤をしながら、若者とのつながりを絶やさないように努めました。しかしながら、オンラインでのユースワークに完全移行はしませんでした。やはり「手触り感のある居場所でのコミュニケーション」を大切にしていたからです。



2 - 様々な事情で家庭での学習環境の整いにくい中学生を主な対象として、学習習慣づくりや高校進学をサポートを目的とした事業で、2010 年より京都市から委託を受け実施。

若者の「声」は社会の声、コロナ禍の重み

センターが閉館していた期間も、センターにやってくる若者はいました。ユースワーカーがセンターの外で若者の話を聞く事もありました。そのような何気ない会話にも、コロナ禍が若者に与えている様々な影響が垣間見えました。電話で連絡をしてきた若者や学習会事業で緊急対応した若者、進学タイミングで生活が変わり行き先のない若者、アルバイトが減ってお金がなくなり自殺を考える若者のさまざまな声です。地域にはぽつぽつと開いている居場所もあったので、そこへ連れて行ったケースもありました。

センター再開後の変化

6月からセンターも再開しましたが、様々な変化や影響も出ました。感染防止対策の一環として、これまで予約・記名不要だったロビー利用であっても氏名等を記入することとなったため、これまでのような匿名性が失われました。今なおセンターに来ていない若者もいて、メンタルに不調が現れているのではないかと心配しています。学校では感染防止を理由に「喋っちゃだめ」と言われ友達が作りづらく新生活になじめない、という高校・大学生の声もよく聞きます。また、センターを学生サークルで利用していた大学生の中には、活動ができないことでグループの存廃にも影響し、そのやり取りのストレスにより命が危なくなった学生もいました。集まること自体が醍醐味でもある学生サークルにとって、接触機会や活動

内容の制限は、予想以上に分断や離散を生み、オンライン授業の過大な負担がある中で、よりその分断やストレスに拍車をかける状況にあります。もちろん、良い変化も見えつつあります。センターは、少しずつこれまでの居場所としての様子が戻ってきています。密集を避けるように伝えても一か所に群がったり、地べたに一緒に座ったりして小さなプログラムにも盛り上がっている様子を見ると、気持ちを発散する場がないんだなと感じます。また、地域活動のボランティア説明会は、これまでも増して盛況です。休校期間を経て、何かしたい、誰かの役に立ちたい、人と会って一緒に活動したい、という若者が多いのだと思います。コロナ禍で時間ができ、「今までの連続する生活」が一旦リセットされたことで、自分なりの楽しみを見つけたり、いろいろな縛りから楽になった若者もいたようです。自転車で琵琶湖一周、寺社仏閣巡り、他大学のオンライン授業受講、韓国ドラマをたくさん見た、趣味を始めた、など新しいチャレンジに取り組んだという声も聞きました³。

「場」が持つ力とユースワーク

今回、若者にとって身近な「場」が止まり、閉じることとなりました。私たちのセンターだけではなく、子どもたちの居場所でもある児童館は6月末まで閉館していました。いくらネット上でのコミュニケーションが盛んでも、同じ場を共有し同じプログラムに参加し、表情や声色、何気ない

3・若者と支援者をつなぐ広報誌『ユースサービス』～若者を考える 若者と考える～VOL.37 特集 コロナ禍の若者のリアル <http://ys-kyoto.org/service/youthservice/>



眩きを対面で感じることでしか得られないこともあります。また「ステイホーム」は全ての若者にとって安全、居心地の良いものとはかぎりません。このようなコロナ禍での若者の様々な声を発信するための機会も検討していますが、その方法を間違えると若者自身が叩かれてしまいかねない、といった危惧もあります。若者の声が軽く扱われてはいないでしょうか。様々な「場」に集い、交流することが制限された、今なお制限されている中で、ユースワークはどう若者の「声」とともに在ることができるのか、これからも活動を続けていきます。



インタビューを終えて

ユースセンターは、若者が社会の担い手として成長するために、また、社会的包摂と幸福を得るために、必要な社会参加と自主的な活動の機会を提供することを理念とした拠点施設です。しかし、学校や他の公共施設と同じように、緊急事態宣言発令時にはユースセンターも閉館に追い込まれ「思いを分かち合える場」が制限されました。閉館中のセンターにきた若者の例だけでなく、インターネットやSNS、電話などで発せられる声は、かけがえのない経験の機会を最も奪われやすい環境に置かれている子ども若者自身の悲痛な叫びです。集える「場」

が開けなくとも若者の「声」を聴ける環境を作ることは、ユースセンターに限らず「公的な施設」の役割であるように感じます。コロナ禍では、Zoom や YouTube などオンラインを積極的に活用したり、SNS を通して直接やり取りをするなど、子ども・若者と少しでも多くの接点を持つとする取り組みも見られました。周辺の公園にいる子ども・若者に話しかけていくこともできるでしょう。声を集め、声や置かれている状況を地域で共有し、できることを地道につないでいくことが求められているのではないのでしょうか。

公益財団法人 京都市ユースサービス協会

若者が本来持っている力を発揮できる場づくりを通して、若者が課題を乗り越えていくための支援をし、若者の市民参加、地域社会への参加を促すことを目的に 1988 年 3 月設立。現在、京都市内 7 つの青少年活動センターや京都若者サポートステーションの受託運営を行う他、さまざまな自主事業を行っている。<http://ys-kyoto.org/>



子ども・若者の「声」が聴こえる場としての子ども食堂

～コロナ禍だからこそ、協働～

近所の子どもの子育て家庭のよりどころとして各地で親しまれている「子ども食堂」。

尼崎市の武庫地区にある子ども食堂「晴れるや」からも、

ごはんを食べたり遊んだりしながらいろんな声が聴こえてきます。

コロナ禍の中、どのように取り組みを絶やさず活動を続けていったのでしょうか。

西 ユミ子さん（晴れるや 代表）

尼崎で生まれ、尼崎で育ち、尼崎市内の小学校の給食調理師として永年勤務。退職後、何かボランティアをと探している中で子ども食堂と出会い、「食事は人を作る」という思いのもとに、尼崎の海でとれた魚や市内の農家さんが愛情いっぱい育てた野菜を毎回使用した、子どもたちの心と体を満たすお弁当配布に取り組んでいる。

聞き手：小倉 祐輔（NPO 法人スマイルひろば）



求めている人がいるかもしれない、子ども食堂「晴れるや」の立ち上げ

長年、小学校の調理師として勤めてきました。

ご縁があった地域の方にお声掛けいただき、自分が暮らす場所とは違う地域で、子ども食堂の立ち上げと運営に関わることになりました。

そこで、朝食をとらず、昼食を子ども食堂でとり、夕食は食べることができるのか分からない、そのような子どもと出会い、とても心が痛みました。今までニュースやドラマでしか見たことがなかった子どもたちの現実が、子ども食堂に関わることで、とても身近なことに感じるようになったんです。自分が暮らす武庫地区は市内の中でも豊かなイメージで語られることがありますが、どのような地域でも、子ども食堂のような場を求めている人がいるのではないかと、思

いました。そして尼崎市社会福祉協議会（社協）武庫支部¹に相談に伺い、武庫地区でも作ってみたい、という話になりました。最初に子ども食堂に関わってから約半年後の2017年4月15日に子ども食堂「晴れるや」のプレオープンを迎え、子どもから高齢者の方まで123人もの皆さんにご参加いただきました。会場探しには苦労しましたが、地域包括支援センターに紹介いただき、地域の特別養護老人ホームの交流スペースを使わせてもらうことができました。施設も「何か地域貢献できたらいいなと考えていたので、いいですよ」言ってくださり、本当に助かりました。毎月2回の開催でしたが、約3年、皆さん毎回楽しみにしてくださっていました。

1 - 尼崎市内6行政区ごとに置かれている市社協の支部。地域福祉活動専門員という、いわゆる「CSW(コミュニティソーシャルワーカー)」が2名ずつ配置されている。

いざという時につなぐことができない、 情けない大人

しかし2020年3月、感染防止対策のため、会場だった施設はご家族でさえ面会中止の状態になってしまいました。やむを得ず会食での食堂を中止し、近所の大きな公園や公共施設に場所を変更し、フードパントリー²という形での開催を余儀なくされました。

3月の一斉休校を受け「給食が唯一の食事で、それが止まると十分に食べられない子どもたちがいるのでは」という思いから、市地域課の職員さんや社協さんに相談し、「こすもプラザ」という名称で緊急的な食支援の取り組みを始めることになりました。手作りの弁当を準備して、予め声掛けをした子どもたちに、公共施設の会場で渡すというものです。事前の声掛けの際には、子ども食堂も市地域課も社協さんも子どもたちにつながる情報を把握していませんでしたので、スクールソーシャルワーカーや学校の先生方にも協力をお願いしました。しかし、やはり個人情報保護の関係で、子どもたちへ情報を届けることがとても難しかったです。特に先生方は、情報を届けたい思いがあっても、自分達も子どもたちとの接触を控えるよう対応を強いられている中だったため、とても苦しまれている様子でした。

それでも、様々な方にご協力いただき、少しずつお弁当を取りに来てくれる子どもたちが増えてきました。中には、ご家庭の事情で取りに来

ることが難しい子どもも居たため、社協さんやスクールソーシャルワーカーさんが配達をしてくださいました。どうしても家で食べることが難しい子どもに限っては、感染症対策を十分に行ったうえで広い会議室を使い、室内で食べてもらうという対応をしたこともありました。あのような状況下、食べることに集中している子どもたちの姿から、食べることで心が癒されているのかもしれない、とさまざまなことを気づかせてくれました。



しかし、災害時と同じような「新型コロナウイルス感染症」の影響下にあっても、子どもの状況が分からない、情報を届けたくても届けられない、つながりにくいということを痛感しました。今回のことで、自分自身のことを「本当に情けない大人だ」と思いました。

みんなの声が聴こえる、 ほどよい距離にある場を

一斉休校が明け、少しずつ学校も再開したころです。学校の行き帰り等に、ちょっと声掛けが

2 - 企業や農家、一般家庭から寄付されるレトルト食品など日持ちのする食材や米・野菜などの食料を無料で直接配布する活動。

できて、子どもたちをはじめ地域の人がホッと
する常設の場を作りたい。特別なできごとや悩
みを聞くということでもなく立ち寄り、もし
て何かあった時には動ける、届けられる場です。
そんな湧き出る思いを改めて社協さん、市地域
課さんに相談したところ、社協さんの紹介で築
60 年の空き家を見つけ、地域のみなさんからの
寄付を集めて改装し、2020 年 9 月 5 日、常設の「晴
れるや」をオープンすることができました。



お隣さんや地域のみなさんのご理解とご協力をい
ただき、これまでの弁当の配布だけではなく、中
高生向けの居場所づくりにも取り組み始めまし
た。保育園にお子さんを預けて仕事に行く前にマ
マさんが声を掛けてくれたり、昔お子さんが使っ
ていたおもちゃを「使ってくださいませんか」とご連
絡いただいたり、これまで以上に人とのつながり
が生まれる場になっています。本当に大根 1 本

でも、「これ使えるかなあ?」と訪ねて来てもら
えるような場でありたいと思っています。

コロナ禍によって、いろいろな方の生活がひっ
迫してる様子を聞きます。そのような現状を踏
まえ、12 月には平日の夜に 5 日間連続で晩ご
飯用のお弁当の配布を行いました。子どもたち
だけではなく、親御さん含め、「晴れるや」に
来てくださる、様々な方の声が直に聞こえてき
ます。スタッフも「やらなあかなあ」と張り
切ってくれ、地域の方との親密さが増したなあ
と感じています。武庫地区の全ての方が「晴れ
るや」につながり、ボランティアになってほし
いなあとも思います。また、そのような地域の
みなさんが、「お母さんも、お父さんも、ご飯
食べていきや〜」と、子どもの周りにいる大人
にも働きかける、そういう関係性があると、子
どもも過ごしやすくなると思います。

コロナ禍での活動は、悩むこともたくさんあり
ます。だからこそ、スタッフ会議では丁寧に話
し合いをしてきました。関わっているスタッフ
が高齢のため、ご家族の意向やご自身の体調等、
それぞれが無理のない範囲で関わったり見守っ
たりしてくださっています。この 1 年は、本当に
みんなでいろいろとやってきたね、という連帯
感が得られた年でした。地域の場での共通体験
が、協働につながったように思います。

子ども食堂 晴れるや (運営団体：まんまプロジェクト)

尼崎の武庫地区で子ども食堂を運営しているボランティア団体。みんなで食を通じて楽しい「居場所」を作
ることを願い、子どもから高齢者までが集う場を約 10 人のメンバーで活動。武庫元町地区に移転し、毎週
土曜日のお弁当配布 (50 食) に加え、毎週木曜日に子ども放課後カフェ「あくありゅうむ」を、
月 1 回中高生の居場所「晴れるやキッチン」を行っている。学生ボランティアの参加も多数。

<https://www.facebook.com/hareruyamukochiku>



**社会福祉法人 尼崎市社会福祉協議会 武庫支部 地域福祉活動専門員
野津悦子さん、園田絹子さんコメント**

西さんは、「晴れるや」を含めて 3 カ所もの食堂で毎週土曜日活動しているのを拝見していたので、とてもフットワークの軽い、温かいお人柄の方だなと思っていました。いろいろな方にお声掛けされ、一人ひとりの良いところを自然と引き出しておられる「接着剤」のような存在です。社協としては、子どもたちがほっとできる場所が増え、地域住民のみなさんともつながれるよう、陰ながら支えていきます。

尼崎市役所 総合政策局 武庫地域振興センター 武庫地域課 住野香織さんコメント

尼崎市は 2019 年 4 月、公民館と地域振興センターの機能が一体となった「生涯学習プラザ」を 6 行政区に 2 カ所ずつ整備し、小学校区に 1 名の担当職員が様々な地域活動をサポートする「地域課」を各地区に配備しました。同じフロアに社協の地域福祉活動専門員もいて、役割分担に最初は悩みました。しかし、今回の「こすもプラザ」事業をきっかけに、地域の子どもたちに向けた取り組みを支援するという共通の旗を目指して、社協とも密にコミュニケーションを取ることができました。

インタビューを終えて

「いざという時に、子どもの状況が分からない、情報を届けたくても届けられない。」ステイホームや一斉休校で、地域で子どもたちの姿を見る機会がなくなった時、多くの地域の子ども食堂は、もどかしい気持ち、情けない気持ちを同じように抱いたのではないでしょう。

食堂に来る人数や、どんなご飯を作っているかといった「実績」がもてはやされる中、改めて痛感するのは、「今その食堂に来ている目の前の子どもと、きちんとつながっているか」ということです。それは単に緊急

連絡先を把握しているか、学校等と情報共有しているか、ということではありません。

子ども自身が、何かあった時に、この食堂（の人のところ）へ来てみよう、頼ってみようと感じられているか、ということではないでしょうか。

子どもたちが気兼ねなく、どんな時でも「ねえねえ」といって食堂へ来てくれるようになつながらこそ、地域が運営する子ども食堂の「ゆるくて、しっかりした関係性」として、子どもたちの生きることを支えると感じます。

学校に行っている・行っていないに関わらず

誰もが受け入れられ自立できる社会を作る

子どもたちの「まなび」と「存在」を支えるフリースクール。

ありのままの自分でいられる居場所が、子どもたちにとって「安心できる場」であり続けるために、何を悩み、どのような対応をしてきたのでしょうか。

一斉休校からの激動の3ヶ月をお聞きしました。

三科 元明さん（NPO法人ここ 理事長）

大学生の時にミュージシャンを目指し路上ライブをしていたことがきっかけで様々な背景を持つ子どもたちと出逢う。夜回り活動や訪問支援をした後、2008年にNPO法人ここを設立。吹田市で不登校の子どもたちの学校外の学びの場「フリースクールここ」を運営する。

聞き手：大島 一晃（NPO法人場とつながりの研究センター）



不登校の子が応援してくれる人と 出会える場を

「不登校状態の子どもが、何らかの形で地域社会と接点を持ち続ける状態」を目指した活動をしています。子どもたちは学校にいけないということで否定され続けたかもしれないが、自分たちを応援してくれる人は、実はたくさんいることを子どもたちに直接感じてほしい。



これは、不登校の子たちと地域の大人が出会う場がなかったことの裏返しでもあると考え、当事者の声が届くしくみにしたい、という思いは今でも大切にしています。

不安を覚えている子の不安に寄り添う

学校が一斉休校になる前から、“ここ”も休校にすることを決めていました。はじめは楽観的でしたが、「マスクは絶対せなあかんで！」と強く不安を覚えている子どもがいました。なんでこんなに不安になっているのだろう？と思って聞いたところ、子どもたちは自分なりにネットでいろいろと調べていたことがわかりました。コロナそのものではなく、コロナで不安になっている子の不安に寄り添うために、さまざまな情報をまとめ検討した結果、集合教室はやめ、オンライン授業に移行するという結論になりました。

た。子どもたちには、私たちが調べたコロナウイルスのことや感染予防対策について伝え、「私たちは“ここ”の中でもし感染者が出たとしても、その人を全力で偏見や差別から守ります。感染したことで今後フリースクールに通えなくなったり、いじめが起きるようなことは絶対にさせません」と、伝えました。

会えなくなったからこそ、子どもの声を聴く

オンライン授業はスムーズに実施できました。しかし、参加したのは10人程度しかいませんでした。聴覚過敏でイヤホンを使うのはしんどい、自分の部屋がない、興味がない、などの理由を聞き、オンライン授業に対するハードルを感じました。参加者が少ないことに不満を訴える子どももいました。

オンライン授業を続けるべきか、直接家に来てほしいかなど、子ども・保護者が何を望み何に苦しんでいるのかを、原点に立ち返って電話で直接聞きました。窮状を訴える子どもや保護者の声を聞き、ギリギリのところで踏ん張っている状況をなんとかするため、職員が自宅を訪問しゲームやスポーツ、料理などをするアウトリーチ型訪問支援事業「STAY HOME, WAIT US」を5月11日からスタートしました。

関係づくりを、はじめからもう一度丁寧に

再開するにあたり、ゼロから組み立て直すことを考えました。子どもたちは明らかに不安やストレスを強く抱えていました。やはり根本にある「自分たちはこのまま学校に行かず生きていいのか」という問いに寄り添うことが大切だと考え、「あなたが社会から排除される理由はどこにもないし、されるものではない」と感じてもらうことからリスタートしました。一方で、外出活動が全然できなくなったことをきっかけに、「なんでもできんやないか、じゃあ自分でできることを考える!」とインドア企画を自ら提案する子が現れたことはうれしかったですね。

地域に多く支えられていることも知れた

うちから感染者が出たら他のフリースクールも批判されてしまうのではという不安がある中で、経営面でも活動面でも地域の方には大変助けていただきました。助成金や融資に申請したものの資金ショートが頭をよぎる中、フリースクールに通っている子たちを支えようと寄付をたくさんいただいたおかげで最大のピンチを乗り越えることができました。こんなにも多くの人に支えられていることを再認識でき、今後それを地域に還していきたいと思っています。

NPO 法人ここ

学校に行けない子たちは「教育を受ける機会を得られないだけでなく、人との出会いの機会も制限されているのではないか」と考え、いろんな人がいることを知り、認め合い、それが自分自身を発見することにつながる場としてのフリースクールを立ち上げ。大阪府吹田市で2校運営し、常勤職員が6名、非常勤職員が2名と小学生～高校生まで50名の生徒が通っている。これまでに延べ20,000人の利用、100名以上の卒業生がいる。2021年2月22日、3校目を大阪・淡路駅付近に開校。<http://npokoko.org/>



君もスーパースターになろう！

自分の可能性が存分に発揮できる社会を作る

子どもたちの「まなび」と「存在」を支えるフリースクール。

子どもたちの成長を願って、困りごとに向き合い、

やれることからやってみる。

コロナ禍でどう「手探り」しながら対応してきたのでしょうか。

松下 祥貴さん（NPO法人不登校・病児自立支援事業 ろ～たす 理事長）

1992年生まれ。大学卒業後に児童養護施設で3年間勤務し、不登校の児童生徒らと関わる中で、不登校支援の道を志す。退職後、不登校支援団体にて1年間行政委託事業の責任者を務め、2019年4月に任意団体「不登校・病児自立支援事業ろ～たす」を設立。2020年11月に法人格取得。中学社会科教員免許・保育士免許保持。

聞き手：大島 一晃（NPO法人場とつながりの研究センター）



「子どもの困りごとをなんとかする」 場をつくる



子どもたちが様々な成功体験を積み重ね、自信をつけていくことを目指したフリースクールを私が生まれ育った地域に作ったのが2019年4月でした。不登校かどうかに関わらず「子どもの困りごとをなんとかする」を基本的なスタンスに掲げています。その子の思いにできるだけ応えていきたいと思っているので、教室活動に

加えて、訪問面談や外出支援、学習支援やおしゃべり相手などの教室外活動にも積極的に取り組んできました。撮り鉄の子の同行もしましたし、中には1年訪問し続けて、ついに教室に来れるようになった子もいます。

オンライン対応は、できることからやってみた

3月の一斉休校時はろ～たすもクローズし、すぐにオンライン対応を考えました。「会えない。どうしよう。動画やなぁ」と単純な気持ちから始めましたが、オンライン会議に参加した経験から手持ちのiPhone一つでやれることからやってみました。手紙や学習教材、Zoomの使い方資料を作成して各家庭に届けたので、比較的早くにオンラインで子どもたちの顔が見られました。個別対応の子にはいっそう丁寧に保護者に連絡することを心がけました。

みんながオンライン対応できるわけではない

春休みは開校しようと思っていましたが結局できず、4月になるとすぐに緊急事態宣言が出たので再びクローズせざるを得ませんでした。スタッフもほぼ自宅待機です。オンラインでコミュニケーションが取れ、子どもたちが何かをするという「スイッチが入る」時間を作ることができたのはよかったです。しかし教室をオンラインに完全代替することは難しいと感じました。例えば、発達に課題のある子にとって、みんな一斉に話し出してしまうことが辛かったり、意思疎通がうまくいかないこともよく見られました。結局、オンライン授業に来た子は全体の3分の1くらいしかいませんでした。全体が苦手な子には個別につながなどして、半数くらいの子はオンラインで関わることができ、残り半数の子の様子は、保護者に連絡して聞くことができました。

「みんなに会える楽しさ」をどうつくるか

世間はオンラインオンラインと言っていますが、子どもからすれば「だるい」が正直なところではないでしょうか。やはり直接人に会いたいのではないかと思います。それでも、通常教室と同じ時間に画面越しにみんなで体操したり

掃除したりするのを楽しみにできていた子もいました。感染状況が落ち着いてきた頃には、生活習慣を崩さないためにも「地域を歩いて写真を撮ろう」といった外出活動を接触を避けながら実施しました。

クラウドファンディングからも見えた、地域のあたたかさ

それでも「オンラインによって希望の見える子もいるかもしれない」と思い、不登校の子へのオンライン支援を行うためのクラウドファンディングを5月に行いました。社会貢献に意欲をもつ地域の塾や私の友人、ボランティアなどから多くのご寄付をいただきました。10,000円ご寄付いただいた層が最も多く（約60%）、中には100,000円寄付くださった方もいて、多くの人に支えられていることを再認識しました。

私たちの最大の強みは、「地域からの支えがあること」だと思っています。近所の畑を子どもたちに自由に使わせてくださったり、子どもが1人でいても地域の方々があたたかく関わってくれる、地域の見守りが機能しているこの素敵なエリアに恩返ししていきたいと思っています。

NPO 法人不登校・病児自立支援事業 ろ～たす

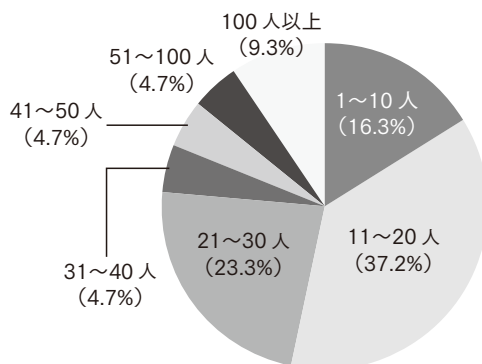
児童養護施設勤務時代に出会った不登校の子との関わりを原点に、その子にしか無い可能性を十分に発揮できている状況（スーパースター）を作り出すことを目指し、大阪市南部でフリースクールを1校2拠点で運営。現在、常勤職員4名と小学生～高校生まで30名の生徒が通っている。団体名の「ろ～たす」は泥の中でこそきれいな花が咲く「蓮の花」に由来し、みんないろいろあるけど花を咲かせてほしいと願って名づけた。<https://lotus20190401.work/>



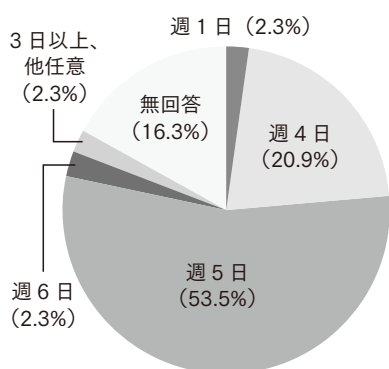
【ミニコラム】フリースクールの今

学校に通っていない児童・生徒が通うフリースクール。ゆるやかな居場所や遊び場など含めると、全国に 400～500 あるとも言われています¹。子ども中心の理念に立って運営する団体の連携・協力・交流・育成を行う NPO 法人全国フリースクールネットワーク² は、加盟団体（全国 91 団体）を対象とした実態調査を 2019 年度に行いました。うち、回答の得られた 43 団体の結果の一部を掲載するとともに、フリースクールの現状を紹介します。

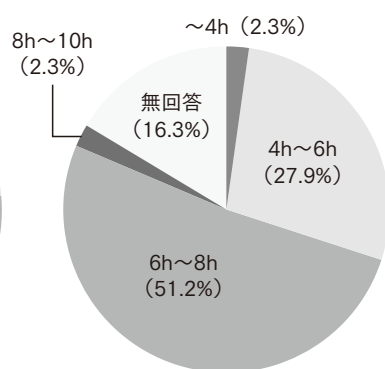
人数規模



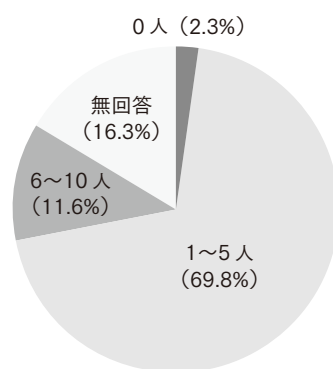
開設日数



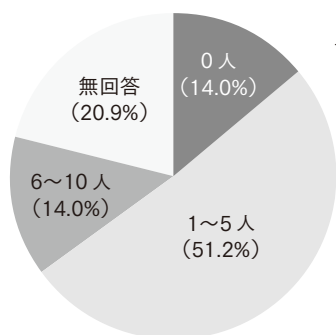
開設時間



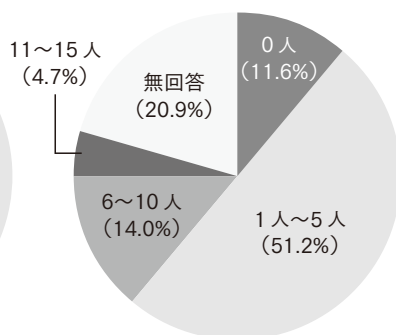
常勤有給スタッフ数



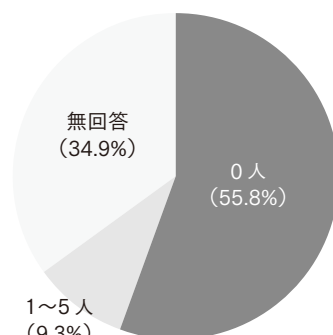
非常勤有給スタッフ数



ボランティア数



常勤無給スタッフ数



1 - 文部科学省（2015）「小・中学校に通っていない義務教育段階の子供が通う民間の団体・施設に関する調査」

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tyousa/_icsFiles/afieldfile/2015/08/05/1360614_02.pdf

2 - NPO 法人全国フリースクールネットワーク <https://freeschoolnetwork.jp/>

在籍している子どもの人数

在籍人数	就学前		小学校年齢		中学校年齢		中卒以上	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
0人	32	74.4	2	4.7	1	2.3	8	18.6
1～5人	4	9.3	15	34.9	14	32.6	12	27.9
6～10人	0	0.0	14	32.6	10	23.3	11	25.6
11～15人	0	0.0	1	2.3	6	14.0	1	2.3
16～20人	0	0.0	1	2.3	1	2.3	1	2.3
21～25人	0	0.0	1	2.3	4	9.3	0	0.0
26～30人	0	0.0	1	2.3	0	0.0	0	0.0
31人以上	0	0.0	3	7.0	2	4.7	3	7.0
無回答	7	16.3	5	11.6	5	11.6	7	16.3

行なっている活動（複数回答）

調理体験（昼食作りなど）	79.1%
個別の学習	74.4%
芸術活動（音楽、美術、工芸など）	74.4%
相談、カウンセリング	74.4%
社会体験（見学、職場体験など）	69.8%
スポーツ体験	62.8%
子どもたちによるミーティング	62.8%
自然体験（自然観察、農業体験など）	60.5%
宿泊体験	58.1%
学習成果、演奏や作品などの発表会	48.8%
授業形式（講義形式）による学習	30.2%
家庭への訪問	25.6%
その他特色ある活動（仕事体験、進路指導、フォーラム開催・研究機関との連携、社会貢献・地域交流）	23.3%

学びの進め方（複数回答）

一人ひとり個別に子どもの学習を進めている	69.8%
フリースクールのオリジナルの教材を使って進めている	55.8%
体験や実技を中心に進めている	51.2%
検定教科書を使って進めている	44.2%
検定教科書以外のテキストを使って進めている	30.2%
フィールドワークをベースに進めている	30.2%
ディスカッションをベースに進めている	25.6%
上記以外の子どもの関心に応じて臨機応変に進めている	39.5%

コロナ禍だからこそ改めて見えてきた

「校内居場所カフェ」の意義

学校の中にある「先生のいない、地域の大人がいる場」である校内居場所カフェ。

学校という「日常」の中にある「もう一つの家らしさ」のある場から、

子ども・若者のどのような声が聞こえているのでしょうか。

コロナ禍で見えてきた「居場所の意義」についてお話を聞きました。

阪上 由香さん（NPO 法人FAIR ROAD 代表理事）

1986年生まれで2児の母。大学では児童教育学を専攻。

卒業後大阪市内で学習塾を経営、その後タイ・ビルマの教育行政の問題と出会い

NPOを設立。学校・行政・地域を「かさねる」事業づくりに挑戦中。

大阪市内で地域コーディネーターなども務めている。

聞き手：**松木 亮**（豊中地区BBS会）



学校の中に「居場所」をつくること

校内居場所カフェは、学校内に設けられた、誰でも気軽に立ち寄れるフリースペースです。相談室とは違い、相談がなくても来てもいいし、飲み物片手にスタッフとおしゃべりしたり、ただぼーっと時間を過ごしてもいい、見守りがある中で多様な人達と交流ができる安全安心な場所です。私たちスタッフは「評価」や「指導」をせずに関わるので、会話の中から生徒たちから見えてきた「不安」や「本音」に寄り添い、生徒の困りごとに早期に気づき、支援につなげ



ていくこともあります。校内居場所カフェというインフォーマルな場では、「自己形成や自分と他者・社会との関係づくりを促す」ことを目指しています。子ども・若者にとって主体的な楽しみや挑戦ができることが成長の機会となり、ヒト・モノ・コトと出会うことで得られる「社会関係資本づくりの場」とも言えるでしょう。

不要不急って、なんだろう？

休校期間中は校内居場所カフェもクローズ。再開後、生徒からはさまざまなしんどい状況のつぶやきを聞きました。普段はあまり家庭のしんどさを口にしない生徒も、家の経済状況の話やアルバイト収入がなくなったことを話していました。みんながしんどくて「自分だけじゃない」という状況だから言いやすかったのかもしれませんが。再開後、不要不急な居残りはせず、すぐ

下校を促されるような雰囲気がなんとなく学校内にありました。「用事がなくてもOK」の居場所カフェに来ることは「不要不急」でしょうか。自分たちにとってリフレッシュできる大事な場所とわかっているから来ていた生徒がいる一方で、行くことを躊躇した生徒も多かったのではないかと思います。こういうときこそ不要不急な場所が息抜きとして必要だなと感じました。

話すことを諦めさせる環境になっていないか

今回のコロナ禍で特徴的だったことは、福祉や教育などの既成の領域でそれぞれのルールがばらばらに発生したため、情報収集すらままならず、スクールソーシャルワーカー等の学校内の専門職でも支援が困難な状態が続いたことでした。労働相談や家賃や学費の滞納、減免の申請、通信環境の整備、心身の不調など、ひとつの家庭で起きる問題は領域を超えていて、しかもその連絡先はバラバラ。いま大変な状況にあることを側に座ってゆっくり聞いてもらうなど、心をケアする大切な時間が感染拡大防止のために無くなり、「もうええねん。よう知らん人にイチから話す気力なんてもうないわ」と抜け落ちていく若者・家庭は少なくありませんでした。このような状況に陥ってからでは「自主的な申請」は難しく、どんなに優秀な専門家や地域に強いネットワークがあっても彼らがそれら

を利用せず、その結果「本当の声」はどんどん見えなくなっているのではないのでしょうか。

日常の営みの中に、もうひとつの家らしさを

「つながり」や「協働」を語るのは簡単ですが、地域の人たちが自主的に運営する「子ども食堂」や、有償ボランティア程度を想定した安上がりな事業でなんとかならないかと期待するのではなく、そのための事業や「人」を育てる予算を確保してほしいと強く思います。若者を支える居場所は「日常の営み」の中にあるべきで、そこには支援や解決のための高い専門性より、とりあえずまるごと受け止めてくれるような「もうひとつの家らしさ」を感じる弱いつながりのほうが必要。校内居場所カフェに来る若者たちは、「相談室より、ここの端っこのほうで話すほうが気楽やねん」と私に話しかけてきます。居場所を支える大人たちが「子ども・若者の最善の利益」を考えてつながっているなら、接点は誰から始まっても必要な支援は目の前の若者に届くと信じています。



NPO 法人 FAIR ROAD

凸凹に公正（FAIR）な寄り添いと、平等（EQUAL）な機会がある社会を目指して 2012 年設立。2017 年から校内居場所カフェ事業に携わり始め、現在大阪府内で高校 3 校、中学校 2 校で取り組んでいる。彼らの利益と声から出発することを大切にし、多様な資源を寄せ集めた事業にこだわっている。

<https://fairroad.org/>



「待つ」から「出会いに行く」へ

～キッチンカーによるアウトリーチ実践例～

事例：公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会（札幌市若者支援施設「Youth+」管理・運営団体）

子ども・若者が「来るのを待つ」のではなく、支援者自身が直接出会いに行くアウトリーチの取り組みの一つとして、「キッチンカー」を使った取り組みが札幌市で行われています。札幌市若者支援施設「Youth+」では、手作りワッフルの提供やフードバンクからいただいたパンや野菜・果物などの食材を活用したアウトリーチ事業に、2017年から取り組んでいます。2020年度は、職員1～2人が市内3拠点をそれぞれ月2～4回程度訪問。キッチンカーを停める場所の確保や運営協働者など、地域の理解と協力は欠かせません。目的は、「若者の居場所を作り、自発的活動を応援する場を作ること」。そして、「若者の課題やニーズを早期に発見し、必要な支援へとつなげていくこと」。孤独感を持つ若者にとっては「第3の大人と出会える居場所」であり、体験機会の少ない若者にとっては「やってみる場」にしてほしいとの願いとともに、若者が主体となり活動する部活動を目指し「Youth+10代みんなのカフェ部」と名づけられています。中学生・高校生年代以上の10代であれば誰でも参加することができ、食べ物は無料提供としています。SNSやチラシ、口コミなどで情報を得た若者が毎回10人くらい参加し、中には民生児童委員から聞いたと参加する若者もいるそうです。何かやっ

てみたい若者が、ここで販売体験を行うこともできるかもしれません。

次来てもらえるかわからないからこそ、キッチンカー周りの場で「かかわりきること」。スタッフは「困っている感のない」若者と一緒に調理活動を行い（※新型コロナウイルス感染拡大防止対策として、今年度の若者による調理活動はなし）、食べて話しながら関係性を作ろうとします。Youth+のSNSに登録してもらうことでつながれると、なにかのきっかけで「思わぬ本音」が語られて個別支援につながることもあるそうです。

感染症対策に加えて食品衛生対策も当然必要ですが、屋外活動だからこそコロナ禍でも「行っている」メリットがあります。居場所は「外」にも作ることができる。移動手段であるだけでなく、「居場所のシンボル」であり、拠点施設の広告宣伝としても活用できるキッチンカーが、子ども・若者の声との「出会い方」の可能性を広げてくれるかもしれません。



[注] キッチンカーで食材提供する場合は、「食品衛生責任者証」と「営業許可証」の取得が必要になり、何を作るかによって営業許可証の種類も変わります（2021年6月から営業許可の内容が変わりますので、それ以降に申請を考えている場合は最新の情報を保健所に確認してください）。食を取り扱うだけに衛生面での配慮は丁寧に行いましょう。詳しくは最寄りの保健所に確認してください。

「料理」を通して受援力を高める

～Taro's Kitchen～

事例：NPO 法人場とつながりの研究センター

2020年3月～5月の一斉休校に伴い、「給食がなくなって、食は大丈夫なのだろうか？」という心配がありました。4月10日、居場所に来ている生活保護世帯の中学2年生の欠食状態が発覚。緊急の食事支援について地域住民と相談し、住民の夕食にお邪魔し、テーブルを囲んで一緒に食べたことと、料理教室を開催したことの両面から彼の自立に向けた取り組みを行いました。

料理教室は、福祉職経験のある地域住民に協力をいただき、事務所で週2回行いました。彼の声を丁寧に聴いていただくことをお願いし、献立決めから食材購入、調理、配膳、片付けまでを一緒に取り組みます。はじめは「何を作りたいかわからない」状態が続きましたが、回数を重ねていくうちに、無意識にこれまで食べて

いた給食の献立にも興味を持つようになり、「●●を作りたい」という提案も出るようになりました！住民支援者と安心できる関係が作れたことで、普段関わりのある大人には言わないような「つぶやき」も多く発するようになり、次の支援へとつながりました。学校再開後も月に2回程度継続して取り組んでいます。



【ミニコラム】地域住民も、子ども・若者の「多様な依存先のひとつ」になれる

校内居場所カフェや Taro's kitchen の事例から、親や先生とは異なる「第3の大人」の役割の重要性が伺えます。第3の大人とは「寅さん」や「親戚」みたいな存在。親や先生とは異なる価値観をもち、「こんなこともいいかもね」とそっと伝えてくれる大人。中には、自宅や職場の一部を開放し、子ども・若者が気軽に立ち寄ってゆっくり

できる「住み開き」を行っている事例もあります。じっと自分の気持ちに寄り添ってもらえるゆとりがある「居場所」の存在は、子ども・若者の自己肯定感が保障され、緊急時こそ大切なのではないのでしょうか？子ども・若者の声を聞きながら、お互いの気持ちを尊重し無理なくできることを一緒にやってみるところから始めてみませんか？

子どもの声が聴ける 地域の大人が増える ためのワークブック

ここまで、コロナ禍において子ども・若者支援に携わる人たちが、何を考え、悩み、取り組んできたかを紹介してきました。子ども・若者の声を聴くためには、「子ども・若者」と大きく括るのではなく、目の前の子どもの物語に「ひとりの人として」寄り添うことが大切です。続いて、

地域に住む子ども・若者のために、私たちにどのようなことができるか、を考えましょう。

子ども・若者支援の取り組みを始めたいと思っている方や、これまで取り組んできたが一度立ち止まって考えたいと思っている方向けに、「子ども・若者の声を聴く」視点から考えるワークです。

①地域を考える、②私たち自身を考える、③子ども・若者が声を上げるためにできることを考える、の3部構成になっています。グループのみなさんと一緒にわいわい話し合いながら考える材料に使ってください。コミュニティソーシャルワーカーも参加して一緒に考えると、より多様なアイデアが出てくるでしょう。

【準備するもの】

ペン

太めのペンをご準備ください。大きい文字で書くとより伝わりやすくなります。

ふせん

アイデアをたくさん出したいときに使います。1枚につき1つの内容を書くのがポイント。共有するときには、似たような話のふせんを近づけるなど、並び替えや分類分けがしやすいです。

模造紙

地図を描いたり、ふせんを貼るときに使ってください。

【話し合いをするときの3つのポイント】

ポイント1. 思いつくままに書いてみましょう

書いてみると、頭がスッキリすることがあります。

ポイント2. わいわい話しながら考えてみましょう

書いたことばの背景は人によって違います。「詳しく教えて!」とお互いに聞き合いましょう。

ポイント3. 否定せず、ちがいを楽しみましょう

正しいことを求めるよりも「こんな考えあるんだ」と、それぞれのちがいをおもしろがるとアイデアがたくさん浮かんできます。思ったことをお互いに否定せず、楽しんでやろうとグループ内で予め共有しておきましょう。

ワーク1 私たちの「地域」を見つめ直してみよう

私たちの暮らす地域を改めて振り返ってみると、同じ場所・時代を過ごしていても住民それぞれの見え方・感じ方はかなりちがうはずです。そのちがいを話し合うことから、知っているようで知らない地域のことを「発見」し、子ども・若者にとって暮らしやすい地域を考えるきっかけにつなげましょう。

1. 地域の「特徴」を考えましょう

A. 地域の歴史や特有の文化、行事などを知ろう。

a. 思いつく歴史や行事を書き出しましょう。

「今あるもの」だけでなく、「以前あったもの」にも視野を広げてみましょう。また、「どんな雰囲気なのか」などの感覚的なものもいいです。

神社での祭、
女の子は
参加できない。

子ども会、
2004年まで毎年
夏休みキャンプ

b. メンバーで共有しましょう。

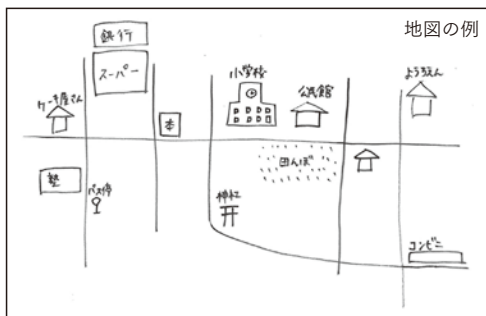
さらに思いついたことを書き足しましょう。

ふせんに書き出した
場合の例

1990年頃に
区画整理
→新しい道に

B. 地域の地図を描いてみましょう。

小学校を中心に、地域の地図を描きます。店や建物、公園や道路、一軒家・マンション、危険予測エリア…子ども・若者の視点にたって描いてみてください。



【深めよう！】 ・子どもの声が聞こえてきそうな場所に、シールやペンでマークをつけましょう。

・以前と比べて変化している場所があれば、ふせんに書いて地図に貼りましょう。

公園での
禁止事項が増えた、
空き地がなくなった

ふせんの例

C. 学校ではどのような学びや体験をしているのか、メンバーで話してみましょう。

子どもたちが最も多くの時間を過ごしている「学校」は、今どのような変化をしているのでしょうか。子どもたちの置かれている現状を想像してみましょう。

【深めよう！】 先生やスクールソーシャルワーカー、学校ボランティアコーディネーターなど、現在学校に関わっている人をゲストにお呼びして話を聞くと、より想像が膨らむでしょう。

2. 子ども・若者に関わる人や組織の連絡先をまとめよう

子どもたちに関わる人や組織は地域にどのようなものがありますか？話し合って、連絡先を書いてみましょう。また、これ以外に子どもたちに関わる人や組織がいれば、空欄に書きましょう。

公共施設	市の子ども相談センターや家庭児童相談室など
小学校	中学校
子ども110番の家	主任児童委員
医者	居場所・たまり場

この表に書かれた人・組織を、先程描いた地域地図に書き写します。気づいたことがあれば話してみましょう。

3. この地域には、どのような取り組みが必要か考えよう

A. この地域に暮らす子ども・若者を観察して、想像してみましょう。

何気なく見聞きする子ども・若者の様子からも、ちょっとした気になることが見えてくるかもしれません。

その状況に至った子ども・若者の背景を想像し、寄り添える関わり方を考えてみましょう。

どんな場面・状況？	それ、なんでだと思う？	どんな関わり方ができそう？
例) 公園でやたら大声を出している子がいる。	例) 家や学校で大声で話す なと言われているのかも？	例) 公園くらいは声を出して 遊ばせてあげよう。
例) 最近やせてきた。 子どもを見かけた。	例) 家族がご飯を作れていない？ きょうだいの世話で 買いに行くことも難しい？	例) お菓子や子ども食堂が作った お弁当、飲食店のテイクアウトメニューを自宅まで届ける。
例) 土日にショッピングモール、ゲームセンターで過ごす子どもがいる。	例) 家にひとりでいる、家族といるのがつらいのかも？	例) 土日に参加できるイベント、自由にすごせるスペース、子ども食堂を開催してみる。

【深めよう！】 1つの場面・状況からいろいろな「それ、なんでだと思う？」が考えられます。他にも考えられることがないか話し合ってみましょう

B. Aの表の右列の中から、「今からでもできそうなこと」や「必ずやりたいこと」を選んでみましょう。

ワーク2 関わる「私たち」を見つめ直してみよう

コロナ禍で、ふだん気にしてこなかった「ちがひ」がグループ内や友人間でも見られ、もどかしい思いをされたかもしれません。大人同士のズレやわだかまりを子ども・若者は機敏に感じ取り、不安を与えることがあります。子ども・若者の幸せを願うからこそ、私たち自身のことも強く考えましょう。

1. 私たちメンバーの「気持ち」を伝え合おう

A. コロナ禍の「今の私の気持ち」を率直に感じてみましょう。

a. 自分自身の気持ちに近いものに印をつけましょう。

一人ひとりの風貌が違うように、考え方や大切にしたい気持ちも異なるからこそ、お互いの気持ちを大切にしたいものです。例えば、「自分の住む地域から感染者が出た」としたら、次の枠の中のさまざまな「気持ち」に近いものはありますか？ 自分自身の気持ちに近いものに○をつけ、特にあてはまるものを3つ選んで◎をつけましょう。ここに書いていないものがあれば、空欄に書き加えてください。

こわい	おどろいている	頭にきた
落ち着いている	うれしい	悲しい
役に立ちたい	緊張している	退屈だ
混乱している	疲れている	ぞっとした
不安だ	寂しい	恥ずかしい

b. ○や◎を選んだ理由を書き出してみましょう。

c. メンバーで共有して、感想を話し合ってみましょう。

例えば、同じことばに○をつけてもその理由が異なるかもしれません。

また、子ども・若者はどう思っているか、想像して話し合ってみましょう。

2. メンバー同士の「ちがい」を考えてみよう

A. 次のような場面に出会ったときどう感じるか、思ったままを書いてみましょう。

私たちは、子ども・若者と接する場面でさまざまな反応をします。自分自身の経験や家族・友人関係などから知らないうちに作られてきた「価値観」が影響し、つい何気ないときに出てしまうものです。

例えば、次のような場面に出会ったときどう感じるか、思ったままをまず書いてみましょう。

食べ残す子がいる	➡ 例) 好き嫌いなく食育を大切にしたい。 例) 偏食はあっても仕方ない。1 切れ食べたら OK
食事中走り回って、 言うことを聞かない子がいる	➡ 例) 食事のマナーを教えたい。 子どもたちでルールを決めて守ってもらう。
注意をしても言うことを聞かない子がいる	

B. 子どもとの関わりの中で、出会ったことのある場面や状況を 表の☆部分に書き出してみましょう。

☆	➡ △
☆	➡ △

C. ☆の部分に対して、どう感じるのかを表の△部分に書き出してみましょう。

D. ☆と△に書いた内容をグループで共有し、気づいたことを話してみましょう。

- 【深めよう！】**
- ・「直感的に」ではなくじっくり考えたとき、「こんな考えもあるのでは？」と思うことを話し合ってみましょう。
 - ・子ども・若者の気持ちに立って考えたとき、どんな思いを持っていそうか想像して話し合ってみましょう。

ワーク3 子ども・若者が「声を出せる環境」づくりを考えよう

子ども・若者が安心して過ごせるためには、集いの場を開いたり、一緒に遊んだり食べたりすることに加え、社会がより良く変わるために「子どもの声を届ける」ことも大人の役割の一つです。そのためには、子ども・若者が自ら声を出しやすくなるための「環境整備」が必要です。どう環境を作るかを考えましょう。

1. 今の子どもたちが置かれている環境を考えよう

A. ふせんに書き出してみましょう。

時代の変化とともに「あたりまえ」が変わっています。例えば、地域・学校・家庭など子ども・若者を取り巻く環境を考えたとき、どのようなことが変化しましたか？

地域の例 ▶

日中、
不在の家が
増えた

交通安全
見守りの人が
増えた

下校時に
声をかける
大人が減った

学校の例 ▶

登下校班の
人数が減った

帰りが
遅くなった

学校行事に来る
保護者の様子が
変わった

家庭の例 ▶

共働き家庭が
増えた

核家族家庭が
増えた

習い事が
増えた？

B. どんなことを書いたか共有しましょう。

例えば、年代や出身地がちがうと、小中学校時代に経験した状況もちがうはず。メンバー間でのちがいや変化を分かち合って、自由に話し合ってみましょう。

2. 子ども・若者の声を聴く場面を考えよう

A. 現在、子ども・若者の声をどうやって聴いているかを考えよう。

「子ども・若者の声を聴く」ための取り組みについて、現在実施しているものに○をつけてみましょう。

表にない取り組みをしているときは、空欄に書いてください。

☐	子ども・若者の声を聴くことの大切さを、大人のみで会議で共有している
☐	SNS やネットを使って子ども・若者の声を定期的に検索している
☐	子ども・若者向けにアンケートをとっている（どんな場面で？）
☐	子ども・若者自身が意見を出せる窓口をつくっている
☐	子ども・若者も参加する会議を開いている
☐	子ども・若者が中心となって進める会議を開いている
☐	子ども・若者が議決権をもつ会議を開いている
☐	
☐	

B. 今後積極的に取り組んでみたいことはありますか？

グループで自由に話し合ってみましょう。

3. 子ども・若者が安心して「声を出せる」環境を考えよう

A. 子ども・若者の「声の種類」を理解しましょう

私たちは「聞こえてくる声」ばかりに耳を傾けてしまいがちですが、実際には私たちの元に届かない声が多様であることを知っておく必要があります。子ども・若者の声には、3つの種類があることをまず理解しましょう。

(1) 聞こえている声／周りの大人に話しかけたりつぶやいている声



(2) 聞こえていない声／子ども同士の中では話が出ているが、周りの大人に伝わっていない声



(3) 発せられていない声／話しても何にもならないと心に閉じ込めている声



B. 子ども・若者が声を出しやすい環境づくりを考えましょう

私たちが子ども・若者の声を聴くとき、どのような声を拾えばよいのでしょうか？

特に、(2) (3) が埋もれたままにならないためには何が必要でしょうか？グループで考えてみましょう。

	どこで聞ける？	発しやすい環境をどう工夫する？
(1) 聞こえている声		
(2) 聞こえていない声		
(3) 発せられていない声		

子ども・若者の“声”を聴くことから始める。

～気持ちでつながるコミュニケーション～

(2020年1月19日第1回、2020年6月7日第4回ユースワーク研究会公開学習会 講演より)

学校の一斉休校、居場所としての公共施設の閉鎖や子ども食堂の中止等、コロナ禍において地域から子どもと出会い、関わり、「声」を聴く場が一気に失われていきました。しかし、そもそもこのような状況になる前から、地域は子どもの「声」を聴くことができていたのでしょうか。大阪府堺市を中心に「子ども一人ひとりの声を聴く」、「傷ついていい子どもはいない」を大切に、20年以上人権教育に取り組んで来た NPO 法人えんばわめんと堺の北野真由美さんにお話を伺いました。

北野 真由美さん (NPO法人えんばわめんと堺 理事長)

大阪多様性教育ネットワーク共同代表ファシリテーター・人権研修ファシリテーター。人権研修や人間関係づくり (コミュニケーション、ネットいじめ、性暴力、デートDV など)、多様性教育を、関西を中心に、就学前の子どもから高齢者などを対象に参加型研修で進めている。

書き手: **小倉 祐輔** (NPO法人スマイルひろば)



子どもたちは気持ちを聴いてもらえているのか？

ある中学校へ人権教育のワークショップに講師として行きました。授業の冒頭で「一人ひとりが大切、そのことをみんなで考えるために来ました」と話した時、ある生徒が「はぁ？ うっとうしいねん。」と言葉を返してくれました。その理由を尋ねると「大人の人って勉強できるやつの話しか聞かへんやろ、おれの話なんか信じへんやろ、大人の言うこと聞くやつのことしか信じへんやんか。何が一人ひとりが大切やねん、うっとうしい、うざいと思ってん」と言ってくれました。

大人は一人ひとりの子どもたちの話を聴いてるようで、目の前にいるのが「どんな」子どもたちか、で話を聴くことに線引きをしてしまって

いるのかもしれませんが。大人の言うことを聞く、指示に従う子どもでなければ、話を聴かない。一人ひとり同じような体験をしても、感じる気持ちは違うこともあるのに、これまでの大人としての経験から先回りして、決めつけたり求められていないのにアドバイスを押し付けたり…。大人は、子どもが持っていない力をつけさせようと、できていないこと、間違っていること、足らないことを指摘し、子どもの無力感を強調させるような関わりをしてしまいます。しかし、子どもも大人と同じ人権を持った一人の人間として、本来持っている力、できていることはたくさんありますし、一人ひとりの考えは異なります。子どもたちが持っている本来の力を促す

「エンパワメント」の関わりを大切にしながら、子どもたちが自分の気持ちや声を「聴いてもらえている」と感じられるような関わりなしに、子ども一人ひとりにとっての「安心と安全」の居場所ができないのではないのでしょうか。

子ども・若者に「声」を出させない社会

目の前にいる大人が気持ちや声を聴いてくれないこと以外にも、子ども・若者にとって、自分の声や気持ちを出しにくい環境が社会には根付いているように感じます。何が良いことか悪いことか、勝つか負けるか、正しいか間違っているか、強いか弱い、そのような「比較・勝負・強弱」がベースにある関係性を、子どもたちはあらゆる機会から学んでいます。学校でも家庭でも、そして地域でも、どこに行っても「自分」が測られる社会では、「一人ひとりが大事やねん」ということは身近に実感できることではないのかもしれません。自分が教え込まれてきた

価値観や考え方とは違う相手に出会った時に、その相手が許せなかったり、変・おかしいと攻撃したり、子ども同士でもお互いのことを「比較・勝負・強弱」の関係性でしかつなげなくなっていることがあります。

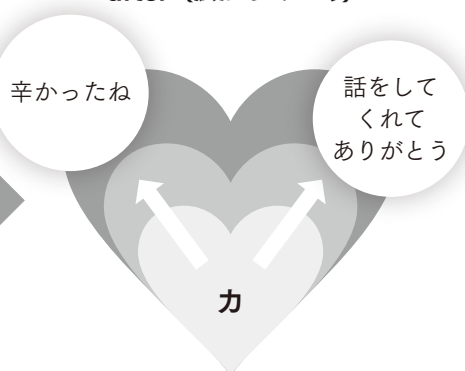
そのような状況の中で、大人が果たす役割は何か、それは「違い」からお互いをどう理解していくか、ということを考えるよう促すことではないのでしょうか。大人が子どもたちを「比較・勝負・強弱」の視点ばかりで捉え、一人ひとりが感じている気持ちや声を出させない状態では、ますます子どもたちを苦しめる環境が維持されてしまいます。自分が他の人と違うことを「言いにくい、出たくない、気づかれない」。迷惑がかかったり、おかしいと思われかねない。そのように子どもたちが思わなくてもよい環境、そして子ども自ら見つけだせている場が大切な居場所づくりの一つだと感じます。

エンパワメント（内なる力）= 自分が本来もっている力を取り戻すこと

before（縮んでいく）



after（広がっていく）



緊急事態宣言が奪ったもの

緊急事態宣言の発令時、学校の休校だけではなく、地域にあった子ども・若者の居場所の多くも一時的に閉まりました。子ども・若者にとっては何が起きているのか、なぜ一斉に休校が勝手に決まってしまったのか、何かできることはないのか等、様々な思いを抱えながらも、それを誰かと共有したり、聴きあったりする場がほとんどなかったのではないかと思います。自分以外の隣の人が感じていること、していることをみながら学ぶ「考える場」としての学校の閉鎖はとても大きなできごとでした。

休校中、堺市では、地域の掲示板に民生委員等の協力を得て、子どもたち向けのポスター（右）を貼りました。市内では92全ての小学校で4～5年生いずれかを対象に「CAP¹」が導入されているので、その理念を思い出してほしいという気持ちからでした。学校再開に向けポスターを回収している時、「これおちゃん知ってんの？」とポスターの中身を説明してくれた子どもがいたそうです。他にも「今日ひとりやねん、お弁当やねん」と話してくれた子どももあり、大人のつながり・協力をもとに実施したポスターが、大人と子どもたちのつながりを作ることになった例でした。

休校中、緊急事態宣言の下では、学校でも地域でも子どもの姿が見えにくくなっていました。

そのような状況で、どのようにして子どもと出会い、声を聴くことができるのか。また、出会

えたからといってすぐに子どもたちが声を出せるわけではありません。子どもが自分の気持ちを声に出せるような「安心と安全」の状態をどうこれまで作ってきたのかが問われるような時期でした。



ふつうに「つらさ」を出し合えるようになること

大人も子どもも、自分の感情をはっきりと伝えられる経験が十分にできていないと感じることがあります。相手に「それは、いや」と言うことが、友達関係や恋人関係の破たんにつながるのではない、だから怖くて言えない、若者の間であるデートDVの課題にもつながっています。他人との関係性の中で、今自分はどんな気持ちなのか、気持ちは自分を大事にすることを教えてくれる大切なものです。

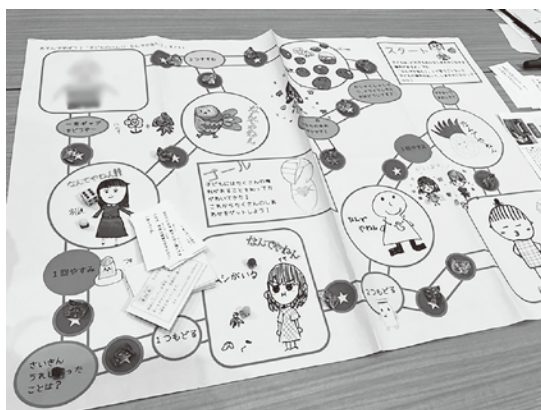
自分の気持ちを他人のせいにならず（私の気持ちはわたしのもの）、気持ちの対立を恐れない、他の人の気持ちを引き受け過ぎない、そのような「気持ちがつながるコミュニケーション」は、本来自分が持っている力を取り戻すことに繋がります。

1 - CAP（キャップ）とは、子どもがいじめ・虐待・体罰・誘拐・痴漢・性暴力など様々な暴力から自分の心とからだを守る暴力防止のための予防教育プログラム。「Child Assault Prevention 子どもへの暴力防止」の頭文字から命名。NPO 法人CAPセンター・JAPAN ホームページより <http://cap-j.net/>



子ども・若者の様々な気持ちの言葉を繰り返し、つなげていく。想定しないような話が出てきた時も、「何を言うてんねん、そんなこと聞いてない」等と否定したり、その人の気持ちをつぶすことなく、聴くこと。様々な「逆境体験²、トラウマ」を抱えている子どもたちもいます。身体と同じように心も怪我をすることがあって、それは変なことではない、言ってもいいことなんだ、そうして「ふつうに『つらさ』を話せるようになる」環境が身近にあることが、子どもたちの不安を安心へつなげていくことにもなります。

たとえ物理的な居場所が制限されようと、地域の中で、あらゆる機会に、子ども・若者の「声」、そこにある「気持ち」を聴くことから始めませんか。



↑毎日の生活の中で「なんでやねん!」「これってどうなん?」と思うことを共有しながら、子どもの権利（条約）について知ることができるすぐろく。

2 - 18 歳未満に遭遇した心的外傷を引き起こす可能性のあるできごとをさす。アメリカの国立研究機関疾病予防管理センターの V. J. Felitti 医師らが行った疫学的な研究「ACE 研究」では、①心理的虐待、②身体的虐待、③性的虐待、④物質中毒、⑤精神疾患、⑥母親／義母への暴力、⑦家庭内での犯罪行動、の 7 つのテーマから質問をしてスコアを測った。子ども時代の逆境的な体験が多いほど、人は社会的、情動的、認知的な問題を抱える可能性が高まる。その結果、喫煙、暴飲暴食、薬物依存等の危険な行動が多くなることで、病気への罹患や事故による障害、犯罪の可能性を高めるだけでなく、人が早期に死を迎える可能性を高める、と指摘された。

「子どもの権利条約」とは（1989 年国連で採択、日本は 1994 年に批准）

「児童の権利に関する条約（子どもの権利条約）」は、子どもの基本的人権を国際的に保障するために定められた条約です。18 歳未満の子どもを、権利をもつ主体と位置づけ、大人と同様ひとりの人間としての人権を認めるとともに、成長の過程で特別な保護や配慮が必要な子どもならではの権利も定めています。「すべての子どもの命が守られる

こと（生きる権利）」「もって生まれた能力を十分に伸ばして成長できるよう、医療や教育、生活への支援を受け、友達と遊んだりすること（育つ権利）」「暴力や搾取、有害な労働などから守られること（守られる権利）」「自由に意見を表したり、団体を作ったりできること（参加する権利）」の大きく分けて 4 つの権利から成っています。

【参考】公益財団法人日本ユニセフ協会 ホームページ https://www.unicef.or.jp/about_unicef/about_rig.html

メンバー紹介

冊子編集メンバー紹介にあたり、

「子ども・若者の声を聴くために、私が大切にしたいこと」を聞きました。

まあ、お茶でも飲んで
ゆっくりしていかないかね？

大島 一晃

NPO 法人場とつながりの研究センター

何ができるわけやないけど
10 年後もグチ吐きに
寄れる場でありたい

小倉 祐輔 NPO 法人スマイルひろば

本人を信じて、
任せて、とにかく待つ。

矢野 良晃 フリースクール For Life

(運営主体：NPO 法人ふぉーらいふ)

一緒に揺らぐ
存在でいること

松木 亮 豊中地区 BBS 会

気を張ることなく、
つながれる人になること

尾崎 知弥

茨城県茨城町地域おこし協力隊

いいたい放題、だんまりでも
こどもの気持ちを
そのまま受けとめる。

山本 康子

日々の雑談。言葉の力。
応答するということ。
アドボカシー。

内田 扶喜子

「会えてうれしい」
「またいつでも」
その気持ちを向けていくこと

藤井 真人 宝塚市社会福祉協議会

発行 大島 一晃 (NPO 法人場とつながりの研究センター 理事・事務局長)

デザイン rashisa inc.

作成 2021 年 3 月発行 (第 1 版)

頒布価格 300 円 (印刷代として) 本冊子は以下の URL から PDF データでダウンロードできます。

https://batotsunagari.net/youthwork_handbook2021/

連絡先 NPO 法人場とつながりの研究センター

〒669-1533 兵庫県三田市三田町 29-14

TEL : 079-553-2521 Mail : info@batotsunagari.net

本冊子は、令和 2 年度ひょうごボランティア基金

「地域づくり活動 NPO 事業助成 (先導的・先駆的事业)」を受け、制作しました。



【私の行動宣言】活動で「子どもの声を聴く」ときに大切にしたいこと

こんなとき	誰に連絡する？	連絡先
食中毒が発生したら	保健所生活衛生課 食品衛生担当	
利用者にコロナの 疑いが出たら	発熱等受診・相談センター	0120-565-653
	厚生労働省コールセンター	
活動中にケガ・ 病気がおきたら	近隣の医療機関	#8000 078-304-8899
	市休日夜間急病診療所	
	兵庫県子ども救急医療電話相談	
子どもの様子が気になる ・こどもに不自然な あざや傷がある。 ・いつもお腹をすかせて むさぼるように食べる。 ・家に帰りがたらない。	市家庭児童相談室	189 (全国共通ダイヤル)
	児童相談所	
不審者をみかけた	最寄の交番、警察「 署 」	
	小学校	
	中学校	
その他子育てに関する 全体的な相談		

